

「家庭の祝福を祈る」

・新聖歌17番

・出エジプト200:12

・エペソの1:14

(1)

今朝は、エペソの章1節から4節の短い箇所です。もう一度、読み直します。

「子どもたちよ。主にあつて両親に従いなさい。これは正しいことだからです。あなたの父母を敬え『これは第1の戒めであり、約束を伴ったものなのです。』」
 あなたはあわせて「地上で長生きする。』」と約束します。

コロサイ書の2章10節でも同じ勧めがあります。「子どもたちよ。主に従いなさい。これは正しいことだから」とあり、コロサイ書では「主に喜ばれることだから」とあります。

両親を敬い・従わねばならない理由は、「主に對して(1)正しいことだから」とあり、コロサイ書では「主に喜ばれることだから」とあります。
 ここで、わたしが足繁く教会に通い始めた頃、牧師と「十戒」を学ぶ機会がありました。「ご承知のように、エジプトにおいて奴隷の苦役を強いられたイスラエルの民が、エジプトを出て、シナイ山に至り、モーセを通して与えられたのが、「十戒」です。与えられた目的は、信仰に生きる者への指針であり、身の安全のためでありました。

「あなたの父母を敬え」の教えの前に、戸惑いを覚えていたわたしは、牧師に、「この『従え』は、無条件ですか・・・」と尋ねたのです。牧師は「無条件です」といいました。その時、「あなたの父母を敬え」は、体内に深く食い込んでくる痛みを覚えませんでした。

その頃のわたしは、「家の中で言えばいいから父を、何故、敬い・従わねばならないのか・・・」と何かという反撥していらたのです。ところが、無条件に従えとなれば、これは大変です。

「父母を敬うものは、あなたの神、主が与えられる土地に長く生きることになる。』」
 有難い約束です。しかし、その前「あなたを敬え」が先です。

目の前の牧師はわたしより11年上の見習い神学生です。年若いもの同士が、「父と母を敬え」の御言を前に、あれこれ思いをめぐらしていました。

ここで、「敬え」・「従え」は、一方的ではありません。父親は、わが子に対して「主の教育と訓戒」(4)とが求められています。自分の思い考えだけをわが子に押し付けることは許されていません。

「主であるお方は、天におられ、人をかたよりにみることをなさらないからです」。親と子は、神の御前において、本来平等・同等であります。そのことに気がかないと、親と子の関係はうまくいきませぬ。

多くの親たちは、自分の感情の赴くまま、必

ています。

わが子に対して、「うそは泥棒のはじまり」と親が厳しく注意するのは、ただ、ただ、親子のあいだにミソを作りたくないからです。

省みますと、日本では「天皇」及び「天皇制」が家庭の象徴でした。

数年前、高知の土佐を訪れた時、片田舎の古い民家の奥座敷の欄間に、明治天皇夫妻と昭和天皇夫妻の写真が並べてありました。それが、日本の家庭の理想的な姿を描きました。いつしか、床の間を背にして、威厳を保つ父親となりました。

父親に威厳を与えたのは、それだけではありません。経済的な理由もありました。子供が父親に口答えをするとき、「おまえは一体誰に喰わしてもらっているのか」「……、これが日本の父親の決めセリです。その時、家中は重苦しい雰囲気包まれました。

さらには、「教育勅語」の影響がありました。勅語の一節に、「爾臣民父母二孝二兄弟二友二夫婦相和シ朋友相信シ父母兄弟合いわし」とあります。日本の文学にえがかれている家庭は、どこか重苦しく、古めかしさを感じます。それでも、神の教えにもとずいた、「自由学園」を創設した「羽仁もと子」さんの働きがありました。……。

敗戦後、日本はGHQの指導により、民主教育の時代を迎え、「家」は解放されたかに思われました。ところが、戦後の貧しさから脱するため、前にも勝って経済が最優先となり、

家の中はバラバラ、アパートの住人に成り果てました。

(2)

モーセに与えられた「十戒」は、古代も古代の教えであります。日本の「縄文式前期」に相当します。しかし、驚くべきことに、21世紀の今日でも、「あなたの父と母とを敬え」は、ユダヤの家庭に揺るぎない教えとなっています。

ある時、現役の教師・教育評論家たちによる座談の席で、教師の一人が、子どもたちの集団万引きを注意した時、「家のお母さんもやっています」と子供たちが返答したということです。これでは親の権威どころではありません。

さらに、少年時代といえば、特に仲間から影響を受けやすい年齢です。自分が非行に走りそうになった時、それを強く押しとどめたのは、「父母がこわかったから」との証がありました。親の権威とは、まさかの時、わが子の誘惑を押しとどめるだけの力がある、いえ、振り切るだけの力があるということです。もしそうしたものを感じなければ非行に走っているということです。

どうして、わが子にとって、それほど親がこわいのでしょうか。怪物が怖いとか、お化けが怖いというのと違います。自らを振り返れば、親のもっこわさとは何かが分かってきます。なかでも、自分を産み・育ててくれた親です。他の誰よりも、自分の弱

が、欠点など知り尽くしてしまいます。にもかかわらず、愛はわたしてゐると思えば、それはもう単なる「わが」はあきらませざる。それは親の持つ「愛」と「真実」とにあゆむのではないうちうか。

例えば、エヒミヤの3章3節に、「わたしは限りなき愛をもって、あなたを愛してゐる。それゆえ、わたしは、絶えず、あなたに真実をいつてきた」「わたしは、愛と真実とが一つです。これがわたしのはなごちうか。エペソ4章15節に、「愛をもって真理(真実)を語る」とあります。愛と真理とを兼ね合わせるおられるお方と言へば、「イエス・キリストでありまてちうか。」「め、みまてちうか。」「イエス・キリストをおいてきた」「ヨハネ1:17(のびす。そ)は、め、みまてちうか」とは、表裏一体です。

「おそひてちうか」とは、厳格な親の雰囲気でしょうか。いえ、おそれの真の原因は、わが子に抱く親の真実と愛とであり、それがわが子に対して無言の説得となります。もし、それに気づかなければ、親の深い悲しみとなり、憂いとなります。

「親の権威」とは、そうした、無言のうちに説得してやまない隠れし力であります。こうした親の権威が感じられなければ、わが子が健やかに成長することはありませぬ。

(3)

「父たちよ。あなたがたも、子どもをおこらせてはいけません。かえって、主の教育と訓

戒によつて育てなさい」(6:4)。

オランダの神学者「セーレン・キエルケゴール」は、「父」「ミカエル」と、「母」「アンネン」との間に生まれました。ところが、息子「子セーレン」は学術は優秀な子でしたが、父親のミカエルが息子セーレンを見つめてゐる内深く憂い始めます。それは、わが子の内に「自分の姿」を見るからであります。

自分と同じ弱さ・性格上の同じ欠点の数々を受け継ぎ、悩み苦しんでいるわが子の姿に気づきました。しかし、父ミカエルは、ただ、座していただけではありません。むしろ、そうであればこそ、わが子が深い淵から抜け出せるように、わが子をすべてイエス・キリストに委ねることとしたのです。

わが子が成長して行く途上で、神を敬うことを教え、神を信じる素晴らしさを身をもって教え諭してきたキリスト者の親がいたでしょうか。

どんなに素晴らしい両親でも、なにがしかの弱さと欠けを持っています。完全な親などありません。にもかかわらず、「父母を敬え」との戒めは、もし、父と母との関係が歪んでいるとすれば、今一度、見直し、修正し、修復し、悔い改め、悪しき関係を歯止めとすることが願われているのではないか、

家庭におけるあなたが、あらためて、問われなければなりません。家庭での話題、その考え方、親と子との関係、子供の将来に対する期待、責任の負わせ方、交友関係のすべて

キリストの名によって祈ります。
「アーメン」

を通して、イエス・キリストが主であるという
な生き方が、親と子との間をなびわたらせぬか
どしかなが、問い直ひねはなりません。それ
はまた、「教会の主」ともなすたもつてイエスが、
また「家庭におごつて主」ともなすたもつてイエス
が強く問わむことぬじつとせぬ事か。
宣教師のお宅の壁にかかけられた美しい
詩句を思ふことか。

「CHRIST IS THE HEAD OF THIS
HOUSE. THE UNSEEN HOST AT EVERY
MEAL, THE SILENT LISTENER TO
EVERY CONVERSATION.」

(この家庭のかつとは、キリスト。食事をし
ただく度の見えぬる客人。全ての会話を黙っ
て聞いておられる沈黙の聞き手)

イエス・キリストが主でありたもう家庭―
そこで、父も母も子供も、人間の生き方とは
何かを覚え、愛を覚え、信頼を覚え、献身を
覚え、犠牲の尊厳を覚えぬような家庭――、
教会はそのような理想の家庭を示していかね
ばなりません。その実現のため、わが子を主
の御手に残りなく委ね、祈り育てなくてはな
りませぬ。

・新聖歌486番

【祈ります】

天のお父さま、親と子の関係にうつして、今朝
大切な御言を示されました。「家庭のかつとは、
キリスト」であります。そのことを覚え、朝
に夕にキリストを崇め、讃美する家庭となら
うめつたごませ。